

の窓から、庭にゐるボチや、クロや、小犬にその栗を投げました。ボチと、クロと、小犬とは、一つづつ、あの不思議な栗をさがして、うまさうにいつまでもく〜ぺちや〜となめてゐました。次郎さんは、今更乍ら惜くなりましたが、ボチやクロや、小犬は持つてにげてしまつて返して呉れませんでした。

三郎さんは、あの栗を、父さんと、お母さんと三郎さんと一つづつたべました。いくらたべてもいくらたべても、おいしい栗はまたもとの大きさにになりました。

そののち何度も、栗がほしくなつて、太郎さんと次郎さんとは三郎さんは邪魔だからといつてつれずに、栗をくれたあのお山のおぢいさんを尋ねて山中をさがしました。が、あの不思議な栗は一つだつてもらへませんでした。終

— 昭和五年六月中旬 —

## ボンポコ狸の

### ボンポコボン

お山の奥の穴には、狸のお母さんと、狸の赤坊が住んでゐました。ここには、狸のさらひな獵師も、狸のさらひな犬も来ませんから、夜になるとお母さんと赤ちゃん、お腹をふくらますと大きな太鼓をこしらへて

「さあ、坊や、お母さんと一しよにうたうよね」

母狸「それ、ポーン〜、ボンポコボン」

小狸「ポーン〜、ボンポコボン」

母狸「ポーン、ポーン、ボンポコボン」

お月様が上からそれを見ていらつしやつて、ニコ〜と笑ひました。お母さん狸と、赤ちゃん狸は、お辭儀をビョコンとして二ひき一しよに、前より元氣よく

村のおぢさんたちも、「ボンボコ踊のボンボコナ  
ボンボコ踊のボンボコナ」とボンボコ踊をはじめ  
めました。

ポチも白も「ボンボコ踊のボンボコナ」

お馬も牛も「ボンボコ踊のボンボコナ」

猫も兎も「ボンボコ踊のボンボコナ」

鶏もヒヨコも「ボンボコ踊のボンボコナ」

それはく面白いちどりなので、いつもだまつ  
てゐるお月様が、又「あつは、あつは」と笑ふ程  
でした。踊りが面白いので村のおぢさん達もポチ  
も、白も、お馬も牛も、猫も兎も、鶏もヒヨコも  
とう／＼「ボンボコ、ドッコイ、ボンボコナ／＼」  
とび乍ら、一列にならんでお山にのぼつてまゐり  
ました。

そして、お母さん狸と赤ちやん狸をとりまいて  
ボンボコ踊をはじめました。

「ボンボコ、やれこれ、ボンボコナ」

「ボンボコ、どつこい、ボンボコナ」

狸のお母さんも、狸の赤ちやんも面白がつて、  
ボンボコボンボコボン と太鼓を叩いてよろ  
こびました。

折角こんな面白くあそんでゐるのに、ポチと  
白とは

「あの狸を捕てやらうよ」といひ出しました。

「あの小さい狸をつかまへてやらうよ」そしてそ  
れからむにや／＼むにや」と何か相談をしました。  
ポチと白は、踊りながら赤ちやん狸の方によつて  
來ました。「ボンボコ狸のボンボコを」皆でいつし  
よに捕へろ」「ボンボコ狸を一二の三」

すると、お月様はさつきから見えてゐて「わるい  
ポチと白だ」と思ひました。そして「ボンボコ狸  
の一二の三」で雲にかくれてまつくらになつてし  
まひました。そして、何にも見えなくなつてしま  
ひました。

「オヤ、直暗だ。よく氣をつけてかへらないとおそろしいよ〜」

と、お母さん狸と赤ちやんの狸は、そのくらい間に逃げて、お山の奥にかへつてしまひました。

そして、お山の奥からボンボン、ボンボンと面白い太鼓をたゝいてゐました。ボチと白とは、おぢさんたちからひどくしかられました。

「見ろ、お前たちがいたづらをしたので、面白い踊も出来なくなつた。いやな、ボチだ。いやないだ。これから誰も、このお山にはつれて來ないから、覺えてゐろ」と、ひどく叱られました。

お月様は、まだ、空でにこ〜笑つていらつしやるのは、お母さん狸と子狸が、村のおぢさんたちの眞似をして、「ボンボコどつこい、ボンボコナ」と踊るのが面白いからでせう。

ボンボコ　ボンボコ　ボンボコナ。　あしまひ

——昭和五年七月七日——

## 犬と猿が仲悪くなつた話

金子彦二郎  
土田和雄

毎年森の中のけものたちは、ひとりの大將をえらぶことになつておりました。そうしないとみんなが喧嘩をするからです。

去年の大將は猿でした。

猿は、高い木の枝から枝へとヒョイ〜とんでは、いたづらをするリスの頭をコツン〜とたゝいたり、また喧嘩をする兎の耳を、ひつぱつたりして、とびまはることができるので、今年もなんとかして大將になりたいと思ひ、ひなたぼつこをしてゐる兎とリスのところへやつて來ました。

「やあ、兎さんにリスさんこんにちは」

「これは、猿さんこんにちは」

「どうぞ、今年も僕を大將にしてくれるでせう

ね」